第6章

「土地の民」からみた国家の形成と変容
——フィジーのマタニトゥ概念を中心にして——

はじめに

オセアニア島嶼諸国の現代を考えるときしばしばつきあたる問題とは，これら「国家なき社会」に新しく構築された諸国家が，そこに住む人々自身にとっていったいどのように認知されてきたのか，というそれである。とりわけ「国家主義」や「民族主義」がこの地域でもリアリティをもちつつある今日，国家に生きる人々からみた国家形成と変容とが，あらためて問われてよい。

本稿はこの問題を，筆者の調査地であるフィジーについてとりあげることにする。1987年の2度にわたるクーデター以来，フィジーはしばしば「国家主義」「民族主義」の論考の対象となっている。しかしながらそうした概念を活性化させたフィジー国家自体は，フィジー人自身にとっていったい歴史的にいかなる意味を担ってきたのか，この問題についてはほとんど正面きった議論が展開されたことはない。フィジーの「土地の民」(itaukei) からみた国家の形成と変容，本稿が以下に試みるのはそのメモランダム的な一考察である。

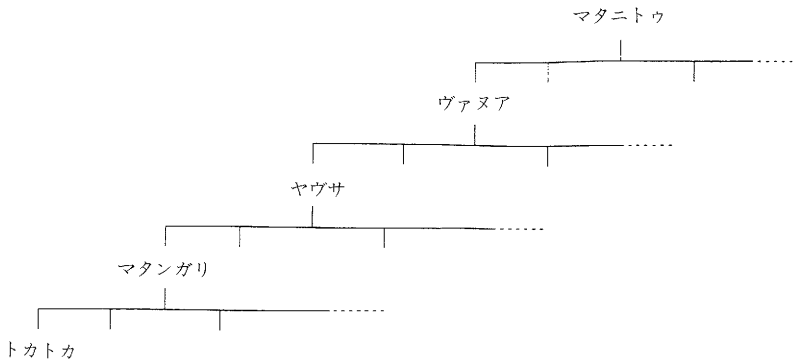
第1節　マタニトゥ概念と社会構造

国家すなわちフィジー語でいう「マタニトゥ」(matanitu) は，文脈的な概念である。それは国家を意味するばかりでなく，政府や「フィジー人担当省」(のちに述べる)をさす言葉であり，さらにはフィジー社会内部の地域的な「連合・同盟」(confederacy)をも指示対象に含んでいる。ここでは議論の出発点として，この最後の「マタニトゥ」からとりあげることにしたい。

フィジー国家は現在，3つの連合・同盟から構成されている。バウ (Bau) を盟主とするクンブナ (Kubuna)，レワ (Rewa) を頂点とするブレンバサンガ (Burebasaga)，そしてタヴェウニ (Taveuni) を中心とするトヴァタ (Tovata) のそれぞれである (ただし近年では前首相ラトゥ・マラの出身地であるラウ(Lau)の地位も高まっている)。これらのマタニトゥはヴィチレヴ島中西部をのぞけば，ほぼ1874年の英領地化当時の同盟関係を踏襲している。ここからうかがえるように，マタニトゥはもともと地域的な同盟体をさす言葉であり，その実態も国家とはほど遠いものであった。マタニトゥがいかにして国家という概念へと成長していったのか，フィジー国家の形成と変容の研究は，こうしたマタニトゥ概念の歴史の発掘から始まるといってよい。

ところで上に記した現在の地域的な同盟関係についてもう少しふれるとすれば，この関係が存続してきた背景として，過去の社会構造が疑似的に再生産され維持されてきた事実を忘れてはならない。それは植民地政府の同定し現実化させた「伝統」が可能にさせたものであり，この「伝統」の命じる社会構造については図1によって示すとおりである。創出され固定化された社会構造はたとえ疑似的なものであっても，今日フィジーの国家構造に大きな影響を及ぼしている。この構造は，分節的でヒエラルヒカルに積み上げられたフィジー人社会とその社会の上にかぶさる権力装置としての国家とを，たやすく想起させる。ここで問題は分節間の横・縦の関係であり，またそうした関係を土台にして結ばれる国家と分節，国家と諸個人の関係であることは

図1 植民地政府が同定したフィジーの「伝統的」社会構造



（出所） 筆者作成。

いうまでもない。これらの諸関係の内実については，フィジー史における形成過程をたどることによって，多くを明らかにすることができるだろう。ただ本論が以下に素描するのは，関係の変遷に関する一部分にすぎない。

第2節 キリスト教化以前のマタニトゥ

マタニトゥとはそもそも何であったのか，この語の当初の意味をめぐる議論は，1835年の白人宣教師たちの渡来以来，少なからず展開されてきている。議論はマタニトゥが複数のヤヴサやヴァヌア[1]から構成された連合体を意味している点で一致するが，その連合の性質をめぐって立場をわかつことになる。連合の土台は血縁か地縁か，あるいは祖先神の共有か，それともそのいずれでもないのか。長い議論の間に状況自体が変化したことを鑑みるとき，確定的な解答を出すことはますます困難になる。ただ確かなのは，マタニトゥ内部には必ず大チーフ一族＝支配者集団の他に，この集団に服従（vakarorogo）する一族と，またこの集団の戦士であり同盟者でもある一族とが，必ず

複数含まれていたということである。さらに重要な点として，マタニトゥはこれら3者の関係においても，一族内部の関係においても，さらには他のマタニトゥとの関係においても，つねに高い流動性を余儀なくされていたという問題が指摘できる(2)。

この流動的状況は，分節集団の積み重ね的拡張のなかであらわれている。積み重ねは基本的に，戦争の勝利・征服・戦力の誇示・流民集団の受入れ・婚姻関係の形成などをつうじて進めらた。勢力の拡張とともに支配集団のチーフが他集団のチーフの上に君臨するパラマウント・チーフとなるとき，彼は各地から献納物を受け取り，また敵との戦いのための援軍を要請できるようになる。宣教師たちはしばしばこうした大チーフたちの権勢を，絶大な独裁者のそれとして記述している。事実彼は神の体現者としていけにえを命じ，自分に対する侮蔑的行動には容赦ない処罰を加えたのだった。

しかしながらこうした大チーフに包合された各分節集団は，あくまで独立の世界を保持しつづけた。彼らは自分たちのヴァヌアとヤヴサ，マタンガリとトカトカの内部に，それぞれチーフや長を有していた。これらのチーフや長は各集団の祖先神の体現者として贈与を受け取り，成員に戦いを命じ，また独自の儀礼をとりおこなった。「(氏族の)祭儀は規模の小さな国家儀礼である」とホカートがいうように（Hocart [1970], p.107），マタニトゥはまるで下位の分節集団が相同的に積み重なった性質を残していたのである。

こうした分節社会の拡張化のもたらす流動性は，サーリンズが対比した「部族社会」と「チーフ制社会」の対立（Sahlins [1972]）を想起させるかもしれない。つまり経済・宗教・政治的な重要性や帰属意識が小集団から大集団へと次元が移行するにつれて減少していく部族社会，一方これとは反対に小集団の統合や存続がチーフ国家という大集団によって保障される首長制社会，これら2つの社会原理の対立をほうふつとさせるからである。けれどもフィジー社会は，少なくとも「部族社会」の拡大的連帯とははっきりと違う構造をもっていた。つまり小集団は所属の違う大集団もしくはその大集団内部の小集団と連帯して，仲間の小集団と抗争し，またそこから離反することが少

なくなかったからである。

この特徴はたとえば，大チーフのトカトカやマタンガリ内部に激しい権力抗争をもたらしている。特に大チーフのポリガミーによって生まれた異母兄弟たちは，それぞれ母方の後ろ楯を得ながら殺傷を繰り広げることがまれでなかった。さらに平民や征服民の小集団は，しばしば別のヴァヌアやヤヴサの庇護下に入り，やがてそうした別集団の成員として認知されることもあった。このように小集団自身の流動性によって，マタニトゥ形成は単に「部族意識の克服」以上の困難を背負わねばならなかった。それは外敵と連帯し同胞を裏切る権謀術数の繰り返しのなかで，いかにパラマウント・チーフの揺るぎなき支配をうちたてるか，という問題であった。

マタニトゥ形成の難しさを象徴的に物語るのは，たとえば大チーフのために兵力を拠出する際の儀礼的パフォーマンス，「ボレンボレ」(bolebole)にみられた修辞性，大げさな忠誠―保護のよそおいであり，そしてこのよそおいのあとにしばしば決行された思い切った裏切り，しかも平然と得意気に行われた裏切りであろう[3]。同盟者や臣下が敵側と組み儀礼の場を大チーフ殺戮の場に変えることがある一方で，大チーフもまた近隣の大チーフと密約を結び，味方の地域を襲撃させることがあった。マタニトゥ形成はこうした裏切りのなかで多集団を力ずくで従えていく過程であり，事実最強のマタニトゥ，バウの大チーフは「バウの悪」(Cakobau)の名前を誇り，「バウのように裏切る」(vere vaka Bau) という慣用句を今日まで残している。

そうして形成されたマタニトゥは，国家と呼ぶにはほど遠い実在であった。そこには国家を成立させるための法や治安や安全がないばかりでなく，何より国家と構成員を結ぶための安定した互酬関係が基本的に欠如しているからである[4]。この関係はマタニトゥの盟主であるパラマウント・チーフと人々の間にも，同様に未発達なままとどまっている。忠誠―保護の絆はつねに不確定なものとして認知され，儀礼はことさらの修辞的表現とはうらはらに，双方の裏切りの伏線として働きつづけることをやめない。チーフの統治の力が人々の健康や暮らしの豊かさをもたらす，という発想もまだ弱いままであ

る（Hocart [1924], p.72)。そもそも「正義による統治の痕跡はかすかにしかみられない。これは別に不思議なことではない。南洋諸島のチーフは正義を施行しないし，われわれが使っている意味での統治をしていないからである」（ホカート [1986], p.64)。

ここでかりに，近代国家への移行の前段階としてチーフ制国家の成立する可能性を探るとするなら，マタニトゥの盟主であるパラマウント・チーフと人々の間には安定した互酬関係がうちたてられなければならないし，さらにまたパラマウント・チーフを統合する一段高次の，つまりはフィジー全体の大チーフが最大の互酬の実践者として出現することがより望ましい。この偉大な大チーフと確かな互酬関係という理念は，フィジーのキリスト教化と植民地化の歴史のなかでくしくも登場することになる。「くしくも」とは，この変化が白人の宣教師や行政官の計算したものでも，ましてやフィジー人自身の予定したものでもなく，両者の出合いのなかで生まれていったものだからである。

第3節　キリスト教国家・植民地国家としてのマタニトゥ

メソジスト教会の宣教師たちは渡来後まもなく，フィジーのキリスト教化の条件として，パラマウント・チーフたちの協力とさらにはチーフたち自身の改宗とが，絶対必要であることを認識した。とりわけ彼らは最強のマタニトゥの盟主，バウのザッコンバウの改宗に狙いをさだめつつ，ラケンバ（ラウ)・レワ・ソモソモ（タヴェウニ）などマタニトゥの各中心地に拠点を築いていった。そのザッコンバウの1854年の改宗は，1874年の英国への領土割譲へとつづく流れのなかに位置づけることができる。それは勢力の衰えつつあったザッコンバウが白人勢力と手を結んで，彼らの保護の下に自称「フィジー王」(Tui Viti）の地位を確保しようとした一連の動きであり，そうして支援を得た彼が「キリスト教の戦い」(Ivalu ni Lotu）の名において異教徒たちを

制圧し，ついにはさらなる大チーフ＝英国国王の臣下としてキリスト教の地フィジーを（他のマタニトゥの大チーフたちを率いて）割譲する道程だったからである。

こうしてフィジーにまったく新しいかたちのマタニトゥが出現することになるのだが，忘れてならないのはこの出現の過程が従来のマタニトゥ発展の形式をそのまま踏んで進行していった，という点である。いうまでもなく，ザッコンバウの「キリスト教の戦い」は，それまで同様に武力による制圧や威嚇によって人々を連帯者と服従者に変えていった。また人々はかつて強大なチーフの神を新しく自分たちの神として受容していったように，キリスト教を「ザッコンバウの宗教」として受け入れたし，服従や連帯の証しとして彼に向けて貢ぎ物を新しく贈り始めている（春日［1992］, p.46）。

ザッコンバウらが服従するさらなる大チーフ，つまり英国国王はフィジー人全体のパラマウント・チーフに据えられ，国王の代理として渡来する総督は文字どおりチーフ即位の儀礼(veibulu)をもって上陸することになる。彼はチーフのしるしに初物（sevu）や表敬の叫び（tama）を贈られ，異教徒の反乱制圧の際には各地から集まったチーフや戦士たちからボレンボレを披露されている。また武器をもち政府の名を借りて徴税を行った者たちに関する記録は，かつての大チーフたちの賦役徴収を容易に思い起こさせてくれる（Gordon［1986］, p.70）。このようにフィジー人は従来のマタニトゥを発展させた延長上に，植民地国家という新しいマタニトゥを迎え入れたのである。

この新生マタニトゥにパラマウント・チーフの代理として渡来した初代総督のゴードンは，従来のマタニトゥとの決定的違いを早々フィジー人に教えることになる。つまり彼は，服従した民の利益を最優先し，彼らの慣習と土地を守ることを宣言したのである。さらに彼のマタニトゥは全土の平和を保障し，チーフたちの気まぐれに代わる公平で一貫した法を施行しながら，教育・医療・交通の推進にも積極的にとりかかっていった。その一方でマタニトゥは，チーフと平民の両者に国王の忠実な臣民たるべきことを説き，反逆的行為に対しては容赦のない処罰を加えてみせた。つまり忠誠―保護，献身

一報酬という安定した互酬関係を要求したのである。

フィジー人にとってこの関係の要求は，新しいマタニトゥと結びつく新しい神の教えと無関係ではなかった。キリスト教は軍事・医薬・経済・文化すべてにわたる圧倒的な力とともに到来し，フィジー人の想像だにしなかった超自然的な力，すなわち「マナ」(mana)をみせつけて，その絶大なマナのみなもとであるエホバへの絶対的服従を強いていた(5)。その服従とは，くしくも「愛」(loloma) や「一つの家族」(dua na matamuvale) という新しい教えへの服従であり，かつての非道徳的な神とは違う善悪に基づく祝福や罰の約束を受諾することであった。つまり新しいマタニトゥの要求と呼応する，道徳的で一貫性のある安定的互酬関係の受諾である。

ここでこの関係の受諾が，エホバへの異例な崇拝様式にのっとって強力に促進されている点に注目しなくてはならない。従来マタニトゥ内部の支配—服従関係は，基本的には物理的な力関係に依存して維持されており，支配者の神は受容されることはあったが熱心に崇拝されることはなかった（サーリンズが論じているように，支配者はむしろ被支配者の土地の神としてとりこまれる場合さえあった〔Sahlins [1985]〕)。だが今キリスト教の神は，圧倒的なマナのみなもととして被支配者みずからが熱心に敬うものとなり，「神に次ぐ」(Toren [1988], p.714) 英国国王と彼らとの献身—報酬の関係を積極的に促している。それだけではない。従来の崇拝は，祭司やチーフや長老など特別な人間だけが寺院で祈りを捧げるのが一般であった。けれども新しい神は「キリスト教」(Lotu)＝「祈り」(lotu)の名前が示すように，すべての人間に礼拝を開放しており，これによって互酬関係も臣民ひとりひとりをずっと直接的に包合しやすいものとなっている。こうしたキリスト教と新しいマタニトゥとの不可分性は，「教会と国家のための乾杯」(Brewster [1967], p.141) に象徴されるように，統治者が積極的に利用するところでもあった。

新しいマタニトゥはフィジー人の「伝統」の守り手としてふるまうために，何よりこの「伝統」の同定を余儀なくされた。同定された「伝統」では，チーフが平民を保護し平民がチーフに従い，そしてともに英国国王に忠誠を尽

くさねばならなかった。しかも「伝統」は先の図にみたように，各人に帰属する集団を教え，こうして帰属を確定された者すべてに氏族共有地を売買不能なかたちで与えるはずであり，つまりはフィジー人の精神的物質的な存立基盤を保障するというものであった。この「伝統」の最終確定は，「現地人土地委員会」(Native Land Commission，以下 NLC と略す) による途方もない調査を要し，のちに述べるように1940年代初期になってようやく完成をみることになる。ただ未完成とはいえ，割譲間もなく彼らに保障された「伝統」は，新しい神と新しいパラマウント・チーフの下に，新しいマタニトゥ，すなわち国家を生きることをともかくも可能にしたのである。

第4節 「土地の民のマタニトゥ」形成運動

新しいマタニトゥの要求した互酬関係は，確かにフィジー人の多くにすみやかに受け入れられていった。とはいえ，割譲から今世紀初頭に至るまで各地で発見された秘密結社的な「扇動的」「異端的」行為は，受容が必ずしも内的変革と結びつかなかったことを示唆しており，むしろマタニトゥや神の力を油断なくうかがう彼らの変わらぬ姿さえ想像させてくれる。この点は，植民地政府が土地や労働力の経済的需要につき動かされて始めた政策の転換が，瞬く間にフィジー人全体を不安状況に陥れたことからもうかがいしることができる。

植民地政府は今世紀に至るまで，自給自足的共同体の守り手たる立場を一貫して固持してきた。コプラやサトウキビの白人農場経営者たちにとって，土地や労働力の獲得は厳しい制約下に置かれており，彼らは割譲以前に売却されてフリーホールドとして認定された土地を取得するか，困難な手続きののちにようやく氏族共有地の不安定なリースにありつくしかなく，フィジー人労働者の雇用に対してもまた厳しく面倒な条件をつきつけられていた。マタニトゥは四半世紀の間，産業育成とフィジー人保護という2つの課題を，

インドからの移民労働力によって何とかこなしてきたのである。

しかしながらこの政策は，1904年に新総督が着任するに及び大きく方向転換を遂げることになる。それはフィジー人の人口減少によっていよいよ目だちはじめた未利用地と，成長の限界につきあたったサトウキビ産業等からの叫びとによって，必然的につき動かされた変化であった。新総督はまた，人口減少がフィジー人の怠惰とチーフ階級の退廃とに多くを負っており，そうした怠惰や退廃が必要以上の保護政策に由来していることを強調した。この解釈はあながち間違いではなかった。暴力的処罰を講じないマタニトゥとチーフとを前にして，フィジー人の共同労働は衰退し「衛生状態の改善」は滞ったままだった。他方強権を奪われたチーフは，逆にその簒奪されることのなくなった地位に安住し，平民の生活にあきれるほど無関心でいることが珍しくなかった。未利用地の売却と長期リースとを促進する法律がこうして通過し，数年の間に30万エーカー近くの土地が白人経営者の農場と化すことになった。フィジー人はたとえ村落の移動を強いられる貸与であっても，政府の命令に従うしかなかった[6]。

英国上院は1908年，初代総督の訴えに基づいて上の動きにストップをかけた[7]。だが産業発展のためにどうしても土地の流動化が必要な植民地政府は，その後もリース促進の法律をかたちを変えて復活させる動きをとめなかった。1912年，政府はリースが土地を有効利用し，フィジー人自身の利益を促進するための必要物であると論じて，彼らに貸与のための遊閑地をすすんで供出するように勧告した。フィジー人はこの勧告にほとんど動かなかった。間もなく，フィジー各地に NLC の調査団が入っていった[8]。フィジー人の土地所有集団を最終的に確定し，政府による統括的土地管理を可能にさせるはずのこの一団は，当時のフィジー人にとっては土地をリースさせ売却させるために派遣された測量団に思われても仕方なかった。悪い噂では，政府は海外からやってくる億万長者に土地を奴隷つきで売り払うために所有者の調査をしており，よい噂でも，政府はかつて同様強制的なリースを再開すべく，所有者に多大な調査費用を負担させているというものだった。このうち後者は少

なくとも真実であり，やはり非常な不満と不信感をもって語られたのだから，マタニトゥとフィジー人との関係が全土で危機に瀕したことはいうまでもない。

それは根深い危機だった。土地の流動化の要請は，自給自足的共同体に生きるフィジー人という「伝統」像に，少なくとも何らかの変更が加えられねばならない時代がきたことを告げていた。彼らはこの期待された「伝統」に，今まで決して忠実であったわけではない。むしろ規制を破って賃労働にかかわり，非合法なリースで地代を受け取るなど，積極的に新しい経済に参入している。だがそれはあくまで，自分や親族の土地から最終的な生活資材を確保できる前提のもとでの参入であり，土地を基本にして現金収入を上げ，暮らしの豊かさを実現していくという理想にのっとっての参入だった。土地のゆくえをめぐる危機意識とはつまり，新時代を生きるに向けての危機意識だったともいえる。

こうした危機感をもっともみごとにつかんだのが，アポロシ・ナワイ（Apolosi Nawai）の始めた「ヴィチ・カンバニ（Viti Kabani）運動」だった。新時代の豊かさの秘密を会社組織にみとり，フィジー人の手で会社をつくろうと説くこの平民の弁舌に，人々は彼こそが白人にまさるマナのもち手であると直感した。アポロシの組織ヴィチ・カンバニは土地の本当の守り手に違いなく，彼自身は英国国王にもましてエホバやキリストに近い存在としてまつりあげられた。アポロシはマタニトゥに逮捕されて獄中生活から帰還すると，その運動を現マタニトゥに対するもうひとつのマタニトゥ建設運動に仕立てていった。「土地の民のマタニトゥ」（Matanitu ni Taukei）をつくる運動にである。彼はこのマタニトゥの王（Tui）であり，忠実な臣民にその言葉だけで祝福をもたらすはずだった。会社はマタニトゥに似せた会議を開き，マタニトゥ同様の全国組織をつくり上げた。すべてうわべの形式だけを模したヴィチ・カンバニは，しかしながらアポロシの逮捕と長期流刑が繰り返されるなかで，次第に局地化し地下組織化していくことになった。

アポロシと多くのフィジー人の夢想した「土地の民のマタニトゥ」は，新

しいマタニトゥ概念がフィジー人自身によって積極的に活用されるに至ったことを物語っている。つまりここでは，キリスト教の神を媒介にして王あるいは大チーフが崇拝されており，しかも彼は臣民との間に安定した互酬関係（服従―保護・献身―報酬といった）を築くよう期待されている。植民地政府の説くマタニトゥ像が，今やフィジー人自身のイデオロギーとして機能しだしたのである。とりわけ強調したいのは，土地の守り手というマタニトゥ概念であり，領土割譲時には不確定だったこのマタニトゥ像が，ここでは当然のものとして要求されていることを忘れてはならない。

さらに重要な点として，「土地の民のマタニトゥ」は植民地政府と違うまったく新しい前提から出発している。王は土地の民であって，その民の一員として土地を守る，というそれである。ただしこの特徴を単純に，反植民地運動や独立運動の原型としてとらえてはならない。というのもアポロシの神聖さは，外来のキリスト教をフィジー発祥のものとみなし，エホバやキリストのマナをフィジー人の手に取り戻そう，とする解釈によって強く支えられていたからである。フィジーがこうしての世界の中心となる以上，土地の民のマタニトゥはしばしば白人やインド人らの異民族を周辺に従える帝国的特徴を呈することになる。キリスト教をめぐるこの解釈は「トゥカ運動」(Tuka)[9]の焼き直しともいえるが，外来の神を「土地の神々」の中にとりこむ意味では，まったくフィジーに遍在的な思考であった。アポロシは土地の神々(kalou vu)とその頂点にたつエホバ・キリストの力とによって，かつての大チーフたちの及びもつかないマナ＝奇跡を行い，このことによって臣民に現マタニトゥから望めなかった数々の祝福を与えるはずだったのである。

第5節　「土地の民のマタニトゥ」/「大きなマタニトゥ」

アポロシたちのマタニトゥ運動概念がいかに近代国家とほど遠いものだったとしても，それはマタニトゥの機軸に大チーフとの互酬関係を据えており，

しかもこの大チーフを土地の民の一員に組み込んでいる点で，記念碑的な出来事に違いなかった。けれどもフィジーの「土地の民のマタニトゥ」は，実は彼らの運動が弱体化していく過程で，まったく別なかたちで用意されていくことになる。くしくもヴィチ・カンバニ運動に勢いを与えたNLCの仕事が，このマタニトゥの基盤を築き上げたのだった。

NLC調査団の説明は時間の経過とともに，少なくとも各地の悪い噂を消していった。政府はさまざまな方法で，調査が土地を取り上げるものでなく，逆にこれを保障し合法的な地代をもたらすものであると説いてみせた。そして第1次世界大戦に勝利し，アポロシを流刑し，各地の知事を白人へと置き換え，つまりは土地の民に強い力をみせつけながら，他方で彼らの生活基盤を「伝統」の確定によって確実に保障する姿勢を示したのである。アポロシ派はこうした保護政策を彼の運動成果として吹聴したが，土地の守り手に転じたマタニトゥ，しかもアポロシ自身に力を行使するマタニトゥというイメージが強まっていったことは間違いない。飴と鞭をあらためて教え直すこのマタニトゥに，フィジー人は反抗の姿勢をひかえ，新時代に向けて用意される好ましい政策を順々に受け入れていった。

こうして復活していく「植民地の平和とよき秩序」にとって，1921年NLCの委員長代理にフィジー人ラトゥ・スクナ（Ratu Sukuna）が就任したことほど，時宜を得たことはなかった。この就任はフィジー人の誤解を解き，また土地の人間のもつ深い知識を利用して，NLCの仕事を少しでもスムースに運ばせようという総督の判断によるものだった。スクナはバウの大チーフの一族にして，第1次世界大戦に義勇軍として参加し負傷して帰還した英雄であり，さらにまたオックスフォードで初めて学位を得たフィジー人であった。血筋において戦士の資質においてまた新時代にふさわしい教養において，彼は新しい大チーフとなるべき人物に違いなかった。チーフたちの堕落を嘆き，平民アポロシを台頭させた権威の真空状態を憂慮したマタニトゥは，この若者がフィジー人の「伝統」を復活させてくれることを期待したのである。

この期待は裏切られなかった。スクナは各地でマタニトゥの代理，フィジ

一人の大チーフとして迎えられ，土地の民の主張に耳を傾けた。全員を満足させる裁定は至難のわざとはいえ，彼が下したさまざまな裁定の公正さは，T・マクノートの指摘するところである（MacNaught [1982], p.118)。1920年代になるとNLCをめぐる不満は，調査の方法や高い費用，土地所有決定の遅れだけが主流をしめるようになってくる。スクナはこの困難な仕事に20年を費やし，フィジー全土をまわりながらフィジー人の「伝統」を完成させていった。

マタニトゥの遣いである新しい大チーフを好もうと嫌おうと，彼に今アポロシ以上の力が付与されていることは誰の目にも明らかだった。スクナはアポロシの流刑にさいし，みずから連行役をかってでて，両者の現実の力関係を誇示しようとした。2人の大チーフ，2つのマタニトゥのいずれを選ぶべきか，フィジー人はかつてと変わらぬ周到さをもって，その力関係を比較し決断を下していった。1938年アポロシ勢力の強く残る北ゾロ（Colo North）の州議会で下された一決議は，こうした過程を象徴的に語ってくれる（*PPC* [1937]；[1938])。州議会はスクナが総督の意向を受けて大チーフ会議に提起した原案について，他の州同様あらためて決議化し受け入れることを期待されていた。その原案とはかつてフィジー人に伝えられた勧告，つまり遊閑地を有効利用すべくこれを政府に預ける，というものだった。多くの州がこの原案を黙って受け入れたのに対し，北ゾロ州議会はスクナからの説明を聞きたい旨の意向を総督に伝えただけだった。「大多数は明らかにそれ（原案）をおそれており，理由をいおうとも議論しようともしなかった」，と白人の州長官は記録している。スクナは翌年北ゾロを訪れて州議会で説明を行い，浴びせられる数々の疑問にていねいに答えていった。4時間に及ぶ応答ののち，メンバーは自分たちだけで議論をもつことを願いでた。こうして会議が再開されたとき，代表のチーフはタンブア（鯨の歯）4本をスクナにさしだしたのである。それは北ゾロの土地の民が今，遊閑地を彼に手渡すという表現であり，彼らはその遊閑地の判断を願わくばスクナ自身に下してほしいと伝えたのだった。

賞賛すべき実績を積み重ねながら，スクナは土地の民としては例外的に州長官や立法議会メンバーの地位を歴任し，フィジー人行政にとっての中核的存在になっていった。マタニトゥとフィジー人は今や，彼を媒介にして良好な互酬関係を維持しているといってもよかった。この関係の安定とスクナへの信頼を手にした当時の総督は，増大する他の民族によってふくれあがったマタニトゥの財政負担を軽減し，あわせて行政の効率化をはかるべく，多大な赤字財政にひたされていた「現地人担当省」の改編を断行するに至った(*CP* [1943], No.24)。現地人担当省を独立採算制にして切り離し，スクナの指揮の下にフィジー人だけによって運営させよう，という決断だった。こうして1946年，スクナを大臣にして生まれた「フィジー人担当省」(Fijian Affairs Board，以下FABと略す）は，まさしく独立の財源・人事権・立法権を付与されて，フィジー人がフィジー人を管轄する画期的な機関となった。フィジー人は事実，FABとこの省を頂点とする法・行政・経済機構とを，「土地の民のマタニトゥ」と呼んだのである。

スクナが指揮するこの新しい「土地の民のマタニトゥ」は，白人が指揮してきた現地人担当省を組織的に受け継いでおり，アポロシのそれとは違っていかにも近代的な機関の様相を呈していた。実際FABは今日もなおフィジー人行政の中心として存在し，「土地の民のマタニトゥ」の頂点としての権威を誇っている。しかしながらこのマタニトゥが近代国家の土台となるためには，少なくとも2つの難題が克服されなければならず，それはFABの出発を振り返るだけで容易にみとることができるのである。

第1にFABは，スクナという異例な人材の指導力を前提にして船出している。血筋と教養と戦士の資格をそなえ，「贈られたものすべてを人々に分け与える本当のチーフ (turaga dina)」だった彼について，フィジー人の多くは現在でも神々が彼に授けたマナの話を伝えている。スクナはアポロシのように土地の至高神デンゲイとコミュニケートしたばかりでなく，白人のたくらんだ罠からデンゲイを守りフィジー人全体を救ったチーフとしても，広く語り継がれている。「土地の民のマタニトゥ」は結局アポロシのそれと同様に，

特別なマナをもった大チーフの指導下で確実に臣民の幸福をもたらすのであり，この大チーフ亡きあとでは，地域的な小マタニトゥのチーフたちが「伝統」的権威を盾にしてあやしげなパワー・ゲームを繰り返す場に堕してしまってもおかしくなかった。

第2の問題は，FABが明らかに植民地政府の指導によって，つまりはより大きなマタニトゥの傘下につくられたものにすぎない，という事実に象徴されている。「土地の民のマタニトゥ」はその存在を，外部の「大きなマタニトゥ」(Matanitu Levu)によってはじめて保障されている。つまりインド人等の異民族を抱え込むマタニトゥ，「伝統」の保護を出て資本と市場の原理にさらされねばならないマタニトゥによってである。アポロシのマタニトゥがこの問題を独自のしかし実現至難の方法で解決しようとしたのに対し，スクナの船出させたマタニトゥは，問題を最初から棚上げして存立するそれでしかなかった。さらには彼の権威自体が，この「大きなマタニトゥ」によって裏打ちされたものだったともいえよう。

ここにわれわれは，現代フィジーの抱える基本的問題が，すべて集約されているのをみる。すなわちスクナという大チーフを失い，独立によって「大きなマタニトゥ」を与えられた，近代国家フィジーの問題をである[10]。今後この問題について土地の民がいかなる解決を模索しようと，それは本稿にみたマタニトゥの軌跡上にしか構築されないことはいうまでもない。

〔注〕

(1) 「ヴァヌア」とは「土地・土地の民・土地の慣習」の意味で，文脈に応じてマタニトゥやヤヴサを指示する語にも変わる。ここではヤヴサとマタニトゥの中間の次元をあらわすために「ヴァヌア」をもちいているが，マタニトゥをめぐる議論がつねにこの用語を必要としてきたわけではない。

(2) こうしたキリスト教化以前のマタニトゥに関するまとまった研究として，Routledge [1985], Thomas [1986] を参照のこと。

(3) 特に Clunie [1977] は，戦争と裏切りについての多数の事例を紹介している。

(4) 「地域的な力関係についていえば，イデオロギーは限定された重要性しかもたなかった。マタニトゥをめぐる支配のかたちを存続させるために役だっ

た行為は，尊敬や信頼から生まれたものでなかったのである」(Thomas [1986], p.41)。

(5) この解釈は，改宗の便宜をはかる宣教師たちが積極的に利用してもいる。

(6) この過程は MacNaught [1979]が詳しく論じている。初期に派遣された総督ゴードン (Gordon) やサーストン (Thurston) のうちたてた保護政策は，1897年に赴任したオブライエン (O'Brien) によって見直しの対象となり，ここでいう1904年のイン・サーン (Im Thurn) が総督となるに及んで，ついに大変革が加えられたのだった。

(7) イギリスに帰国してスタンモア (Stanmore) 卿となったゴードンの議会演説が上院の賛意をとりつけた経過については，France [1969], pp.159-162 が詳しい。

(8) 本稿のここから以下は，フィジー国立アルカイーヴス所蔵の行政文書・新聞・雑誌，メソジスト教会の保存記録，ならびに筆者の聞き取り調査とに依拠している。提示する各事例が多岐の資料に基づくため，特に資料の限定されたものにかぎって出所を明示するにとどめたい。

(9) 19世紀後半，ナヴォサヴァカンドゥア (Navosavakadua) がヴィチレヴ島ラー地方で起こしたトゥカ運動は，Worsley [1957], Chapter 1 の紹介によって知られている。この運動については，近年 Kaplan [1988] が再研究を行っている。

(10) 多民族国家・チーフ制社会としてのフィジーの抱える問題点を，フィジー人の視点から論じようとしたものとして，橋本 [1988]，春日 [1994] を参照のこと。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

春日直樹 [1992]，「キリスト・悪魔・貨幣－フィジーの呪術と資本主義－」(『社会人類学年報』18巻) 33-55ページ

春日直樹 [1994]，「フィジー人の民族問題」(黒田悦子編『民族の出会うかたち』〔朝日選書〕朝日新聞社)

橋本和也 [1988]，「第三世界における「民主主義」－フィジーのクーデターが提起したもの－」(『静岡県立大学短大部紀要』1号) 1-16ページ

A・M・ホカート (橋本和也訳) [1986]，『王権』人文書院

〈外国語文献〉

Brewster, A. [1967], *The Hill Tribes of Fiji*. Philadelphia : Johnson Reprint Co. (Originally Published 1922).

Clunie, Fergus [1977], *Fijian Weapons and Warfare*. Fiji Museum Bulletin 2.

CP [various issues], *Council Paper*, Legislative Council of Fiji. Suva : National Archives of Fiji.

France, Peter [1969], *The Charter of the Land*. Melbourne : Oxford Univ. Press.

Gordon, Arthur [1986], "An Account of Mr. Walter Carew's Tour of the Island of Na Viti Levu on Behalf of the Government," *Domodomo*. Vol.4, No.2, pp. 57-81 (Originally Published 1875).

Hocart, A. M. [1924], "King's Justice," *Man*. No.54, pp.71-73.

Hocart, A. M. [1970], *Kings and Councillors*. Chicago : Univ. of Chicago Press.

Kaplan, Martha [1988], "Land and Sea and the New White Men : A Reconsideration of the Fijian 'Tuka' Movement." Ph. D. thesis, Univ. of Chicago.

MacNaught, Timothy [1979], "The Fijian Political Experiences." Ph. D. thesis, Australian National University.

MacNaught, Timothy [1982], *The Fijian Colonial Experiences : A Study of the Neotraditional Order Under British Colonial Rule Prior to World War II*. ANU Pacific Research Monograph 7, Canberra : Australian National University.

PPC [various issues], *Proceedings of Provincial Councils*. Suva : National Archives of Fiji.

Routledge, David [1985], *Matanitu*. Suva : Univ. of the South Pacific Press.

Sahlins, Marshall [1972], *Stone Age Economics*. Chicago : Univ. of Chicago Press.

Sahlins, Marshall [1985], *Islands of History*. Chicago : Univ. of Chicago Press.

Toren, Christina [1988], "Making the Present, Revealing the Past," *Man*. No. 23, pp.696-717.

Thomas, Nicholas [1986], *Planets Around the Sun*. Sydney : Univ. of Sydney.

Worsley, Peter [1957], *The Trumpet Shall Sound : A Study of 'Cargo' Cults in Melanesia*. London : Granada Publishing Ltd. (ピーター・ワースレイ〔吉田正紀訳〕『千年王国と未開社会』紀伊國屋書店　1981年)